



Kumamoto University Library Bulletin, No.20, June. 1998

● ドドネウス「植物誌」

永青文庫蔵雑記類より (一)

● 細川宗孝の死 (1)

● デジタル人間の図書館感

● 検索の現在と未来

— 学術情報センター・セミナーに参加して —

● 電子図書館事始めⅢ

— 学内紀要の電子ジャーナル化 —



ドドネウス「植物誌」(1618年版)

## ドドネウス「植物誌」

樋口康夫

この度、図書館長や職員の方々のご尽力により非常に貴重な図書を購入して戴きました。知られる限りでは、この本（正確にはこの版）は稀少であり、現在日本では熊本大学のみ存在するという事ですので、これからはこの図書館の宝の一つに数えられることは確実でしょう。

皆様はドドネウスという人物をご存じでしょうか。日本史を選択された方の中には記憶の片隅にこの響きが残っている人もおられるでしょうが、ほとんどの方はご存じないと思われます。しかし江戸の中期、蘭学が盛んであった頃、多少とも西洋の学問を志したことのあった者の耳には、彼の名は届いていたと思われます。というのも、当時熱心に求められ、高額であがなわれたオランダの書物のリストの中に彼のものも入っていたからです。特に、今回購入されました本 *Cruydt-Boeck*（植物誌の意）は野呂元丈によって寛保から寛延年間にかけて「阿蘭陀本草和解」として翻訳されております。

そこで、この本の紹介をさせて戴くこととなりますが、まずドドネウスの略歴から始めたいと思います。彼は、ラテン語では、Rembertus Dodonaeusと呼ばれ、1517年にかつてのフランダース、現在のベルギーの首都であるブリュッセルとアントワープとのほぼ中間の所にあるメヘリン（Mechelin）という町に生まれました。父は裕福な商人であったようです。18歳でルーヴァン大学の医師の資格を取得し、以後10余年にわたりヨーロッパの主として大学を中心に転々として学問を修めたようではありますが、詳細は判っておりません。ただ、彼は幼少の頃より古典の素養があり、地理学、天文学、博物学、取り分け、植物学には情熱を傾けて精励していたことが知られており、恐らくは、専門の医学のみではなく、広い意味での人文科学の多様な知識を深めていたと考えられています。彼は、1546年頃から積極的に著作活動を始め、出版社からの要望もありほぼ毎年のように出版をしております。当時図版を載せた植物誌は各国で非常に人気があり、様々の形で出版されました。彼の本も各国の言語に翻訳され、順調に版を重ねております。その間に、彼は故郷のメヘリンに戻り、開業しましたが、名医としての評判が高くなり1548



Rembertus Dodonaeus, 1517-85  
（ドドネウス35才頃の肖像とされている）

年には市の担当医の職につき、1574年まで勤めております。在職中に、その条件よりは有利と思われる、ルーヴァン大学の教授の職、スペイン王の宮廷への招きなどがありました。しかし、断ったとされております。しかし、彼の名声は極めて高くなり、オーストリア皇帝マクシミリアン2世の侍医への招聘は友人の紹介もあって、承諾しております。ドドネウスはこの職を4年程で去り、ケルンなどに一時的に居を定めました。そして故郷のメヘリンに戻っている間に、ライデン大学の植物学の教授に任命され、ほぼ3年勤めた後、1585年に没し、その地の教会に埋葬されました。

さて、この本の原本となったのは *Stirpium Historiae Pemptades Sex*（以下の説明のように、全6巻が5部よりなる植物誌の意）という名の、フォリオ版の大きなサイズの本で、1583年、アントワープで出版されております。これは一冊本ですが、全6巻で、各巻が5部からなり、つまりは最終的には30部からなる構成となっております。ドドネウスはこの2年後に死んでおりますけれども、この本はその前に彼自身によって加筆、修正がなされ、1616年にその改訂版が出ております。この本は題名からも察せられますようにラテン語で書かれていたために、それを翻訳した自国版（オランダ語）が必要とされ、改訂と増補を加えて、これもフォリオ版の *Cruydt-Boeck* がフランソワ・ファン・ラ



ヴェリニングによってライデンのプランタン社から1608年に出版されました。この第2版、つまり、1618年出版のものが今回の本となります。

内容的には上で紹介したラテン語版とほぼ同じものとされており、以下おおよその内容の説明を致しますと、この本は第1巻第1部が総論となっておりますが、以下は、植物の名称のアルファベット順の解説書であり、第2巻は香りの良い花や花輪になるような植物、第3巻は主として根が薬用にされる植物、第4巻は穀物、豆類、水草などの植物、第5巻は食用となる植物や園芸植物など、第6巻は樹木の他に、(両)インドを含む外国の植物が主に述べられております。その記述に当たっては、現代の分類法からすれば問題はあると思われませんが、厳密ではないにしても(花の)形態によって近種のをまとめるなど、おおよそ科学的な分類

の萌芽が見られるとされております。また、各植物の項目ごとに、種類、形態、生息地、花期、名称、性質、薬効、利用法、追記などの整然とした説明がなされております。こうした近代の特徴をそなえたシステムティックな説明の方法は後の植物誌のひな型となりました。

この本は度々申し上げましたように、大形のフォリオ版で、本文のみで1495ページの非常に立派なものであり、当時の専門家に彫らせた端正な図版も多く載せられていて、保存状態も良く、眺めているだけでも4百年の時を越え、かつての朴訥とした博物学者の情熱が伝わるように感じられます。ご来館の折に皆様が高覧下されることを希望します。

(ひぐち やすお 法学部教授 英文学)

## 永青文庫蔵雑記類より(一)

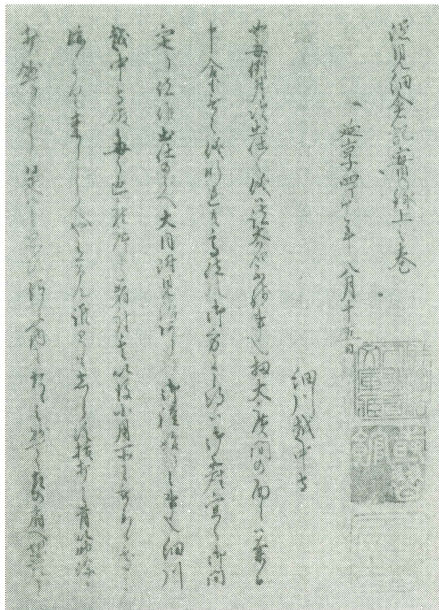
# 細川宗孝の死(1)

西田耕三

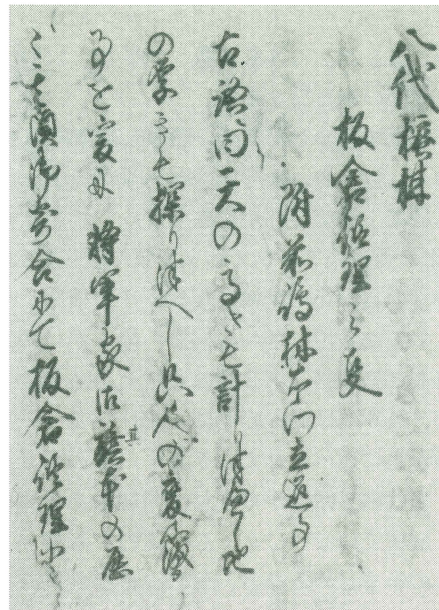
熊本藩第七代の藩主であった細川宗孝は、延享4年(1747)8月15日、江戸城内において、旗本板倉修理に襲撃された。宗孝33歳、修理22歳。この事件は、馬場文耕の『近代公実厳秘録』や松崎観瀾の『窓のすさみ』、それらに依る芥川龍之介の『忠義』等によって知られるが、さらにこれらの原拠となった実録、あるいは記録類が多く書かれ流布していたことが高橋圭一氏によって報告されている(「板倉修理の刃傷」、『国語と国文学』、平成8年5月号)。永青文庫蔵の、『隠見細倉記実録』(写本、3巻1冊)、『八代檣柑』(写本、5巻1冊)も、この事件の記録・実録である。『隠見細倉記実録』の最初の条を引用して事件を紹介しておこう。(句読点引用者。一部表記を替えた)。

如毎例月次出仕之儀は、諸大名不残事也。扱大広間の面々は、兼て申合にも無之儀なれ共、高位の御方に候得ば、御上座宜く御間定り、諸侯出仕のうへ大目附見繕あり、御礼始り候事也。細川越中守殿毎之通座席に着座、其以後小用所に被参候処に、跡より来りし人や有けん、誰ともしらず抜打に首筋際に打懸たり。是はと思ひ給ふ内に、たゝみ懸て左の肩へ

切懸たり。越中守殿も、我に覚る敵なし、全乱心人成べし、殿中と申とかく組伏ばやと思はれけれ共、其内手疵深ければ叶難く、如何せんとしばし立休らひ給ひし内に、誰いふとなく、小用所に大乱也と云声のしければ、御杉戸御番兩人、御徒目附衆聞付け、早々御目附衆へ告ければ、大目附石河土佐守殿、御目附中山五郎左衛門殿其外追々馳集りて、土佐守殿、越中守殿江向ひ被申候処に、誰人共不知、誠に血に染みたる如くなれば、御家名はと問し時、たえしき声にて、細川越中守と答ふ。誰人討かけしやと尋の時、越中守殿答られしは、誰共見分けず、上下着用の者なりとありしかば、夫より直に土佐守殿、御徒目付呼て、御坊主の分外へ散不申様に集め可置由、扱又御門を早速打せ申べし、其段達し候様にと、御目附衆より被申渡ければ、早速申通して、御玄関前御門より外、桜田迄の御門を打たりけり。越中守殿療治の儀は、詰合の御医師衆に被仰付之。夫より切懸し人有べしと、大勢相尋しに、ゑんの上に抜身の脇差あり。扱こそ此所に脇差あれば、此近所外へは行まじ、殊更無刀と見へたり、隈々を



(『隠見細倉記実録』巻頭)



(『八代橘柑』巻頭)

さがせよとて尋しに、小用所のすみに人あり。それより御目附御徒目附よびよせ、いかなる人ぞととはせしに、修理なりと答ふ。御目附衆被申しは、如何敷殿中も不憚かくの体は如何と被申ければ、修理殿被申候は、誰共不知自分へ切掛しにより、私事も討懸候となり。扱其元の髪は何とて切被申候哉とありければ、人をあやめ立難く存候故、髪を切申候。それは何とて切被申候哉。其節修理殿被申候は、懐中の鉄にて切しと答へ給ふ。全乱心と見えし上は、御徒目附立寄、蘇鉄の間脇小部屋へ入置、御徒目附衆其外御小人目附置るとなり。

修理が乱心していたこと、宗孝にとっては何のいわれもない横難であったことから、後に、修理と板倉一族との角逐、細川家の凶兆が物語として付加されていくのだが、『隠見細倉記実録』の記録はまだそれ以前の段階のものである。本書はこのあと、宗孝の退出、修理の水野監物への預け、小用所付近の絵図、大目附御目附衆よりの書上、宗孝の手疵の様子、宗孝と懇意の御城坊主の名前、修理親類の処置、8月16日の宗孝の死とその法名(実際は即死に近かったようである)、8月23日の修理の切腹等を記す。物語化は進んでいないが、いくらかの感想は書きつけられている。襲撃された宗孝は、目附衆にむかって、「殿中の儀に候得共、事を奉憚、相愼候故、心外に所々手疵を負申候」と語った。これに関し、「誠に越中守殿大勇にして、慎みの難成所を慎み被申候事、貴賤感じ入しとなり」と言い、事件を知った細川上屋敷の家中が残らず下馬へ駆け付けたことを「尤至極」と言い、宗孝退出の際、玄関迄

迎えに来た家中の中に旧臣とみえる老人が人参をもってかごに立寄り悲しむ体(後に、松江清太夫として物語化される)を「家中の面々の心の中察いられ待る」と語り、修理の三田の屋敷は、もと有馬伊予守の居屋敷だったのを伊予遠島により召し上げたもので、「誠に不吉の屋敷之由也」と記す。

本書には筆記者名も年時も書かれていない。蔵書印は、永青文庫の他に「時習館」と「記録局」。記録局は時習館の一部局で、安永8、9年の頃からそう呼ばれていたようだが、筆記年時の推定の根拠にはならないし、記録局で作成されたという確証もない。細川家中の誰かが、出廻っている記録、実録類から取捨し、記録の部分再編して作ったものではなかろうか。

『八代橘柑』は、ほぼ『近代公実厳秘録』に依っている。

この事件に関し、江戸藩邸の『日記』の延享4年8月23日の条に、本多伯耆守(老中)が細川一族の織田山城守に伝えた「板倉修理殿今曉切腹被仰付候」という言葉と、同27日の条「隆徳院様(宗孝)今朝五時御出棺被遊、御葬送相済候事」という記事、及び以降の法事の記事がみえる。

なお、永青文庫には、以上とは別に、『延享秘録』という本がある。今回はこれによってこの事件とその周辺について、さらに詳しくみてみることにしよう。

(にしだ こうぞう 文学部教授 国文学)



# デジタル人間の図書館感

原野 一 誠

私とコンピュータの出会いは建築中の九州大学大型計算機センターに米軍ファントム戦闘機が墜落した昭和43年、九大薬学部助手になった年である。その後、昭和47年に単結晶X線回折法による医薬品分子の構造解析を始めたのがきっかけで計算機センターに通うようになってから、コンピュータとの対話は25年を超えた。

当時、数週間かかっていた反射測定やカード入力方式による数値計算も最近ではワークステーションやパーソナルコンピュータで数日で終了し、大型の汎用計算機にお世話になることはほとんどない。並列計算機やベクトルプロセッサを利用する場合も学内LANのおかげで計算機センターへ出向く必要もなくなった。複雑な図版を含む論文作成や推敲もワープロ機能で解決、紙に原稿を書くことも英文タイプライターを利用することもない。さらに、CD-ROM版の辞書集、百科事典、地図などをCDチェンジャーに入れて使用するようになってから、これらの書籍を手にすることもなくなった。郵便を利用するのは年賀状だけ、ほとんど電子メールで済むようになった。英国化学会などは、レフェリーの意見も電子メールで飛び込んでくる始末である。自宅と大学のネットワークがPPP接続できるようになってからは、ほとんどの仕事が自宅の書斎から対応できるようになった。

このような背景を持つデジタル人間の私が薬学部図書分館のお世話をする事になり1年が経った。一昔前までは図書館の情報化は貸出業務、カード検索に代わる手段と考えられていたが、最近では文献の2次情報どころか1次情報もデジタル情報として提供される時代となった。出版社のほとんどが活字から電子製版へ移行したわけだから、紙に印刷するのは余分なこと、いつでもできることであり、図書の電子化は当然の成りゆきといえる。なかでも、電子化の恩恵を受けている分野に化学情報がある。ケネディの情報公開法によりロッキード社から独立したダイアログ社がChemical Abstracts (CA) 情報のオンラインサービスを始めるまでは、化合物の合成法や性状を調べるためには図書館にこもり、膨大なCA誌を頼りに、オリジナル文献を探すことが日常的であった。最近、熊大でもCD-ROMや商用ネットワークが利用できるようにな

り、書庫にこもることもない。CAのCD-ROM化に抵抗していた先輩達も、収載された化合物数が1000万個を超えたことを知ると皆納得したようである。若い人は文献検索はコンピュータでやるものと思うようになった。

コンピュータ支援による作業により膨大な時間的余裕が生まれ、「ゆとり」として趣味などに生かされ、ひいては創造的思考の再生産のために活用できているはずである。ところが、私はまったく逆の経験をしている。問題が早く解決すればするほど、ますます問題が増え余裕がなくなる。原因はいろいろ考えられるが、周囲と調和していないことが問題のようだ。「元来、コンピュータは本来人間がやれることをスピーディにやるだけのことであり、人間の発想を変化させることはない」という考え方もあるが、情報化が成熟すればそのメリットを享受できるはずである。

ところで、開かれた大学という言葉をよく聞く。地方大学の発展は地域社会と歩調を合わせるべきと思うが、民間との共同研究、卒後教育、公開講座などに精を出しても限度がある。大学が所有している膨大な情報、さらに教育・研究活動により創り出される情報を電子化して公開すべきである。薬学部でシラバス、学部案内などをホームページで、医薬品情報を図書分館のサーバを使って発信させてもらっていること等はその一例である。

書籍が紙を記録媒体にしているのは決して地球環境にやさしいことではない。森林伐採、酸性紙、焼却時のダイオキシン発生などの問題を考えると、紙以外の記録媒体に置き換わるのもそう遠くはないはずである。

情報を収集、分類、蓄積し、検索することはコンピュータが最も得意とするところであり、これに高速ネットワーク機能が加わり、急速に応用分野が広がっている。

電子化により、書籍以外の画像を含めた24時間電子図書館が実現することが私の夢である。熊本はその規模などから情報ハイウェイによるマルチメディア化の効果が期待できる格好の都市である。大学図書館はその中心に位置すべきものであり、そのために総合情報処理センターなどを含めた図書館の在り方を議論すべき時である。

(はらの かずのぶ 薬学部教授 薬品製造工学)

# 検索の現在と未来

—学術情報センター・セミナーに参加して—

中尾 康朗

平成9年10月6日から平成10年2月27日までの間、第3回文部省学術情報センター・セミナーに参加する機会を得ました。その報告や感想を簡単にまとめてみたいと思います。

学術情報センター・セミナーは、高度化する学術研究支援活動の中核となる要員を育成することを目的とした、前期・後期あわせて18週間の長期研修であり、平成7年度に開始され、今回で3回目をむかえます。研修内容は、大きく分けて、一般講義・演習・見学会・個別研究・個別指導・研究成果発表・研究レポート提出といったものになっています。

一般講義では、各分野における専門家による講義を受講し、学術情報に関する基本的な事柄や最新事情を学習していきます。演習・見学会では、ワークステーションを中心とした実習、国立国会図書館、TRC図書館流通センター等の施設見学、高等セミナーハウスでのマルチメディア会議システム実習、平成9年度学術情報センター・シンポジウム参加、教育研修用ビデオの作成等を行いました。

後期は個別研究活動が中心で、研究発表とその研究レポートの提出を行いました。私の研究テーマは「Javaクライアントを用いた日本語フルテキストデータベースの設計」ということでしたが、その研究レポートは後日、学術情報センター・セミナーレポートとして、各大学図書館、研究機関、情報処理センター等へ送付されるので、詳しくはそちらの方を参照してください。ここでは、主に今回のセミナーで取り上げた検索システムに関連して最近の電子図書館をめぐる事情を考察することでセミナーの報告・感想にかえさせていただきたいと思います。

近年WWWが急速に普及したおかげで、われわれは比較的手軽にしかも低コストで情報を発信できるようになってきました。図書館にとっても、それまで書庫の奥に眠っていた情報の再利用を促すということから、電子図書館化の可能性を生み出しています。電子図書館というと、言葉だけが先行している感がありますが、その基本はあくまでテキスト情報であります。画像や

音声、動画といったマルチメディアへの対応も無論、電子図書館という概念に含まれるわけですが、現在図書館が持っている資料やネットワーク上の資源を見回してみると、文字情報が主体です。この文字情報については大きく分けて2系統のデータが存在します。1つは従来から図書館が提供しているオンライン目録情報(OPAC)などで、これを2次情報(メタデータ)と呼んでいます。もう1つは1次情報と言われる生のテキスト情報、つまり原文そのものです。現在1次情報を扱うことは、著作権の関係でそう簡単ではありません。しかし、社会的な動向から見ても、電子的な環境で1次情報が提供されるようになることは、そう遠い未来のことではなさそうです。事実、学術情報センター電子図書館システム(NACSIS-ELS)など、現在でも実用化されたサービスが随分と存在しています。手前味噌になりますが、わが図書館でも主要な電子ジャーナルのサービスや、実験的ではありますが、電子化された学内紀要を閲覧することができます。これらの1次情報や2次情報あるいはそれらを補完する他のメディアが連携しながら統合的にサービスされる、さしあたって電子図書館のもつデータのイメージはそういうものではないでしょうか。

さてその文字情報も情報量が少ないうちは、目次や索引等からたどっていくことで目的とする情報に行き着くことができます。ところが、そういった文字情報が大量に提供されるようになってくると、われわれは自分の求める情報がどこにあるのかを探し出すのに苦労するようになります。現在、インターネットにおけるWWWの状況は、そういった事情を端的に物語る好例です。どうしてもそこには情報検索システム、とりわけ1次情報そのものを扱う検索機構といったものが必要になってきます。

情報検索システムは機能的に、検索を実際に行う部分と利用者からのデータを処理する部分(インターフェース部分をふくむ)とに大きく分けて考えることができます。検索を実際に行う部分では、いかにすれば効率のよい検索を実現することができるかということが追求されます。一方、利用者からのデータを処理する部分



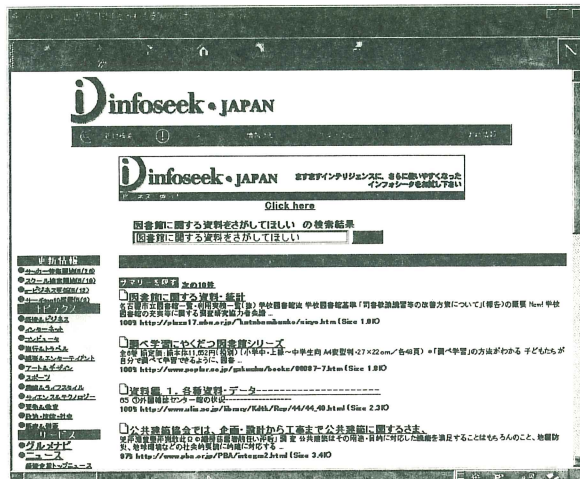
では、利用者の操作性をはじめ、高いセキュリティの実現などを目指すと考えてよいでしょう。効率のよい検索ということに関して、現在の検索システムでやってくれることは基本的には文字列検索にとどまっています。文字列とは文字の並びです。利用者によって入力されたキーワード文字列とまったく同じ文字列を含んだレコードを表示する、という手法になります。例えば、「図書館」というキーワードで検索した場合、得られる検索結果は図書館という文字の並びを含んだデータであって、図書館に関するデータではありません。したがって現在の検索では、利用者が自分の心の中でほしいとイメージするデータを得るには、それなりに利用者側の配慮が必要です。つまり利用者は、キーワードのゆれや、関連する概念などを考慮にいたした上で、キーワードを選定することを要求されるのが現状です。例えば、「コンピュータ」だけでなく、「コンピューター」「computer」といったキーワードも含める必要があります。自分の求める情報を見落とす可能性があるためです。これも将来、検索システムがさらに洗練されて、図書館に関する情報といった主題で検索することができるシステムが一般的になってくるかもしれません。

その1つの解決方法として、従来から、「図書館学」や「図書館情報学」といった文字列を同時に検索できるように、部分一致検索ということができるようになってきているシステムが大半です。しかしこれも決して万能ではありません。最近では、検索結果の重みづけや、一旦出た検索結果に対する評価をフィードバックして、検索の適合性を高める技術といったものも実用化されてきています。

その他に、「図書館に関する資料をさがしてほしい」といった質問を直接コンピュータに指示し、しかも適切に答えてくれるといった検索ができたら、今よりもっとユーザフレンドリーで直感的な要求に応じることが可能になります。現在、こういった自然言語による検索は、擬似的には実現されているものがありますが、厳密な意味での自然言語検索というものは存在していないのが現状です。

また、対象となる1次情報の構造に特徴がある場合などはその構造にもとづいたきめの細かい検索を指向する動きもあります。SGML形式のデータなどがそうです。

次に、利用者からのデータを処理する部分では、まずインターフェースの操作性のよさがあげられます。その反面、1次情報等、著作権付きの情報が提供されるようになると、情報の発信者としては、その情報が



Infoseek JAPANによる自然言語検索の例

本来利用すべき利用者によって利用されているのか、適正な利用を図り、運営していくことが求められます。こういったデータのセキュリティや、ユーザの認証等の事柄は、ともすれば操作性のよさを犠牲にすることがあります。使いやすさとセキュリティの高さ、この二律背反する事柄をいかにうまく調整していくかが、難しいところであります。

また、利用者からのデータを処理する部分は、ネットワークを流れるデータという視点からも関係してきます。優れた検索システムはその処理内容に応じネットワーク上の適切な地点で処理することができるシステムであり、それは結果的にネットワークの負荷を下げることに繋がります。

少し前だと検索と言えば、専門家に代行してもらうことが、多かった時代から、利用者自身が検索を行う時代へと変わってきました。しかし、まだまだ利用者の心の中にある欲求と、実際に検索できることの間には、少なからずハードルがあり、ある程度の工夫をしないとめざす情報にはたどり着けないのが現実です。大学に関して言えば、利用者自身による検索(search)がスムーズに本格的な調査(research)へとつながり、より円滑に学術情報が流通、活用される検索システムが今後、実用化されていくことが望まれます。

(なかお やすろう 附属図書館 電子情報係)

〈資料紹介〉

# 購入資料

- 多機能性有機分子の精密科学大系  
22Vols with CD-ROM  
(平成9年度自然科学系特別図書)
- Landolt -Börnstein Vol.17A~B,Vol.18,Vol.22A・B
- The Dictionary of Art 34 Vols
- 雑誌記事索引集成 人文科学編 全50巻
- イラストレイテド・ロンドンニュース  
1842-1848 全13巻
- The Central Nervous System of Vertebrates:  
An Introduction to Structure and Function.  
3 Vols
- A Critical Bibliography of Twentieth-Century  
Literature Studies, 1954-1994 4 Vols
- A Critical Bibliography of American Literature  
Studies, 1954-1994 4 Vols

# 本学教官寄贈著書

- 若曾根 健治 教授 (法・法学)  
中世ドイツの刑事裁判—生成と展開  
若曾根 健治 著  
多賀出版 1998.2
- 中本 環 教授 (教・国文学)  
一休宗純の研究  
中本 環 著  
笠間書院 1998.2
- 町 塾 Mati zyuku  
中本 環 編集・発行  
No10 1998.4
- 葉 陵陵 助教授 (法・公共政策学)  
中国行政訴訟制度の特質  
葉 陵陵 著  
中央大学出版部 1998.2
- 今江 正知 元教養部教授  
郷土の自然に親しむ 自然観察の手引き  
今江 正知 監修  
熊本自然環境研究会 1998.3

※ 「多機能性有機分子の精密科学大系」は薬学部分館に、その他の資料は中央館に配架していますのでぜひご利用下さい。

## 屋外掲示板&キャレルデスクを新設しました



中央館正面玄関の左側に、図書館の屋外掲示板を設置しました。図書館からの連絡伝達手段の1つとして、休館日をはじめ、延滞図書の督促者リスト、公共機関ポスターを掲示していく予定です。できるだけチェックをするように心がけてください。

中央館2階には、静かに勉強ができる一人用キャレルデスクを35席用意しました。図書の文学コーナーと新着雑誌コーナーの間にありますので、どうぞ。

第2閲覧室でも、4人用閲覧机22台・椅子55脚を更新しました。

皆様のご利用をお待ちしています。

(情報サービス課 資料サービス係)



# 電子図書館事始めⅢ

## —学内紀要の電子ジャーナル化—

### 学内でできる著作権処理

電子ジャーナルは、雑誌の本文や画像がネットワークを介してパソコン等で利用できるものですが、その作成や利用においては新たな著作権処理が必要になります。本誌No.17では、著作権を保有する出版者が提供する電子ジャーナルの一例としてEESを、また同No.18では、我が国の学協会と協力して電子ジャーナル化を進めているNACSIS-ELSを紹介しましたが、今回は学内で著作権処理をしながら作成する電子ジャーナルを紹介します。

### 『文学部論叢』と『熊本法学』の電子化

附属図書館では、平成8～9年度の文部省科学研究費補助金によって、学術情報センター、鹿児島大学、京都大学、金沢大学、長岡技術科学大学、国際基督教大学と共同で大学紀要の電子化を中心とした研究を行いました。

本学では特に著作権処理を主なテーマとし、紀要に関わる著作権の権利保有者から権利使用の許諾を得ながら実際に電子化を試みることにしました。

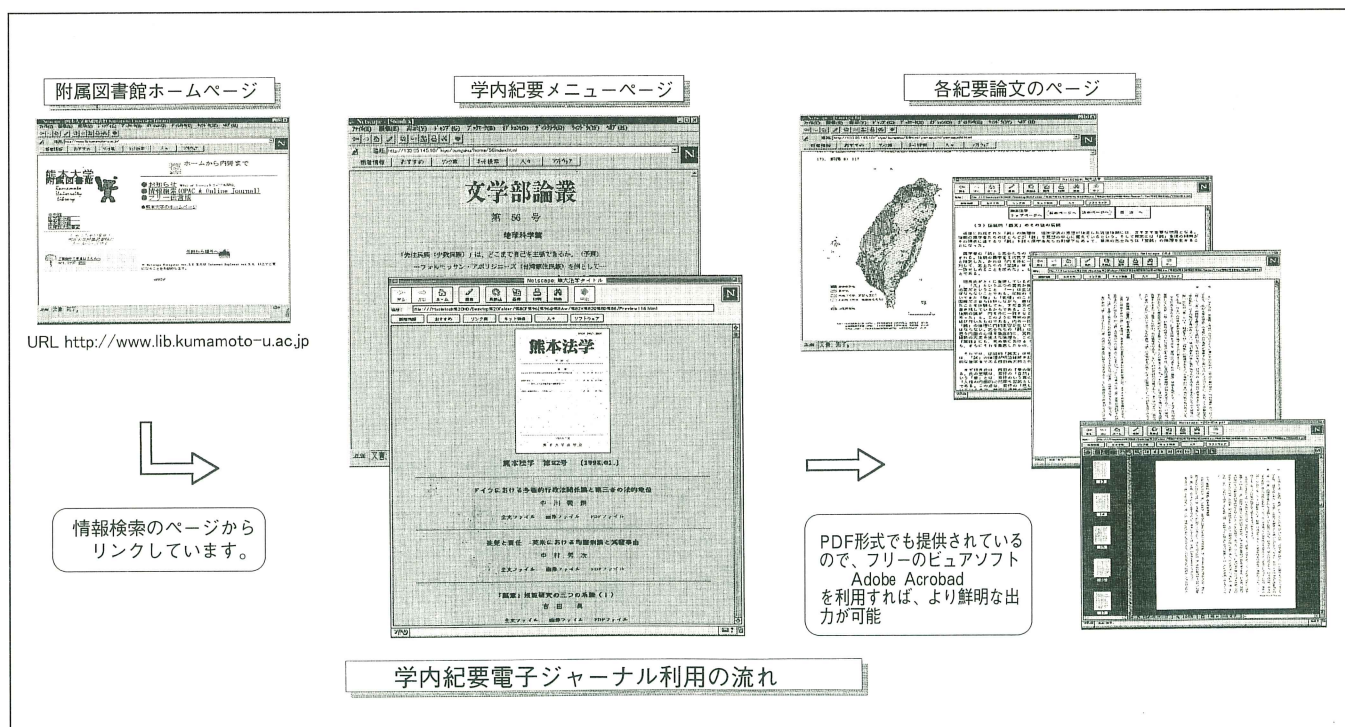
幸い、文学部と法学部のご協力を得、『文学部論叢』の第54号～57号(1997年3月)と『熊本法学』の第92号(1998年1月)について全文データ、画像データそれにPDFデータの3種類の様式のデータを作成することができました。

### ホームページでの試験公開

作成したデータは、附属図書館のホームページから、「情報検索」のメニューを選び、その中から「学内紀要電子ジャーナル(文学部論叢・熊本法学)」のメニューをクリックすることで利用できます(下図参照)。

### 学内紀要類の電子化に向けて

今回、文学部と法学部の紀要について試験的に電子ジャーナル化を行いました。将来、全学的な紀要電子化事業を進めるために、予算措置の問題、著作権処理に関わる全学的なコンセンサスの確立、各学部での紀要編集工程との整合性など諸問題について検討を進めていく予定です。(電子情報係)



# お知らせ

平成10年3月31日付で図書館協議会および図書館委員会が廃止され、平成10年4月1日付で図書館運営委員会が制定されました。構成員は下表のとおりです。

部局名	職名	氏名
文学部	館長	金原理
文学部	助教授	大野龍浩
教育学部	教授	中本環
法学部	教授	鈴木桂樹
理学部	助教授	圓藤章
医学部	教授	小川尚
薬学部	教授	原野一誠
工学部	教授	松尾日出男
附属病院	助教授	岡嶋研二
大学教育研究センター	教授	森光昭
医療技術短期大学部	教授	平山紀美子

## 日誌(平成10.1.1~4.30)

- 1.20 図書館委員会
  - 講演会「大学図書館におけるコンソーシアム活動の可能性」東北大学附属図書館 佐藤義則氏
  - 古典籍研修会
- 1.22 平成9年度国立大学附属図書館事務部長会議(於静岡)
- 1.29 附属図書館協議会
- 2.3 古典籍研修会
- 2.17 古典籍研修会
- 2.24 附属図書館係長会議
- 3.2 目録システム地域講習会担当者連絡会議  
~4 (学術情報センター)
- 3.17 古典籍研修会
- 3.20 図書館委員会
- 4.21 古典籍研修会
- 4.23 第28回九州地区国立大学図書館協議会(於福岡)
- 4.24 第49回九州地区大学図書館協議会(於福岡)
- 4.27 熊本県大学図書館協議会(九州東海大学)

編集後記：この五月より図書館では新たに、試行ではありますが学内紀要の電子ジャーナルを公開しました。サービスのための新しいサーバマシンは紆余曲折の末、熊本ゆかりの花々「肥後六花」にあやかってrocca(ロッカ)と名付けられました。肥後六花は熊本独自の品種であり、古くは永青文庫にもそのスケッチを見ることができます。由緒正しい名前のパワー？で、このサービスも順調に芽をのばして行ってほしいと願っているこのごろです。

# 人事異動

- |          |   |           |  |
|----------|---|-----------|--|
| 平成10.4.1 | 情報管理課長<br>高塩勝也<br>(徳島大学附属図書館<br>情報管理課長)               | 平成10.4.1  | 情報サービス課<br>相互利用サービス係<br>牛島直史<br>(情報サービス課電子<br>サービス係) |
| ◦        | 図書館専門員<br>梅尾勝征<br>併(薬学情報サービス<br>係長)                   | ◦         | 情報サービス課<br>医学情報サービス係<br>井真祐美<br>(情報管理課電子情報係)         |
| ◦        | 情報管理課総務係総務<br>主任<br>五島哲哉<br>(医療技術短期大学部<br>事務部会計係用度主任) | ◦         | 東京学芸大学附属図書<br>館情報管理課長<br>小川正明<br>(情報管理課長)            |
| ◦        | 情報管理課電子情報係<br>中尾康朗<br>(情報管理課雑誌情報係)                    | ◦         | 工学部学務係留学生指<br>導主任<br>田尻峰郷<br>(情報管理課総務係<br>総務主任)      |
| ◦        | 情報管理課雑誌情報係<br>野元剛二<br>(情報サービス課資料<br>サービス係)            | ◦         | 教育学部教務係<br>島本真理子<br>(情報管理課総務係)                       |
| ◦        | 情報サービス課<br>資料サービス係<br>濱崎千雅<br>(医療技術短期大学部<br>図書室)      | 平成10.3.31 | 定年退職<br>飯田典子<br>(図書館専門員)                             |
| ◦        | 情報サービス課<br>電子サービス係<br>伊波ひとみ<br>(情報管理課電子情報係)           | ◦         | 定年退職<br>佐藤昌代<br>(情報サービス課<br>医学情報サービス係)               |

熊本大学附属図書館報「東光原」(とうこうげん)\*  
第20号(Vol. 7 No. 2)平成10年6月発行  
発行所 熊本大学附属図書館〒860-8555 熊本市黒髪2-40-1  
TEL 096(342)2273 FAX 096(345)9087  
HP <http://www.lib.kumamoto-u.ac.jp>  
編集 山根文夫・成田和則・中尾康朗  
野元剛二・伊波ひとみ

※現在の中央館の敷地一帯が、旧制第五高等学校時代東光原と称する運動場であったことに由来する。